

## 2017 年度 IR 専門委員会活動報告書の公表にあたって

IR 推進室を設置して、2 年目となりました。IR 推進室では、教学データの収集・分析を行い、分析結果は IR 専門委員会での審議を経て、学内の関係組織に報告しております。

本委員会では、これまで GPA や TOEFL-ITP<sup>®</sup> スコア等の各種の指標を用い、教学改革に資する分析を行ってまいりました。2018 年度改正の教育課程においても、本委員会の分析をもとに、第一外国語及び情報処理科目の教育内容の改善を図りました。

また、平成 26 年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム (AP)」テーマ (学修成果の可視化) 採択を受け、本学ではリベラル・アーツ教育の学修成果を可視化し、アセスメント・モデルを構築する事業に取り組んでおります。本委員会では、本事業を推進すべく、引き続き教学データの統計分析を行ってまいります。

本委員会で取り扱う教学データの分析結果は、データの性質上、学外に公表できる内容は限られているため、2 年次から 4 年次の学生を対象として毎年 4 月に実施するアンケートの分析結果の一部をご報告いたします。今回は、前年度一年間の「授業に対する満足度」及び、「スキル」「能力」「技術」をどの程度身につけることができたかを問う項目について、専攻、学年、志望順位別に分析を行いました。ご高覧いただけましたら幸いです。

今後も本委員会は、客観的データに基づき、教学改革に資する活動を続けてまいります。

2017 年 9 月

東京女子大学 IR 専門委員会

## 2017 年度実施の 2～4 年次アンケート調査の結果報告

本学では、毎年 4 月のオリエンテーション時に、新 2 年次、新 3 年次、新 4 年次を対象とした「教育・学生生活に関するアンケート調査」（以下「在学生アンケート」と表記）を行っている。このアンケート調査は、在学生が本学の教育内容や学生生活についてどのような意識を持っているのか、また本学学生の学修実態などを明らかにすることで、今後の教育改善に活かすことを目的としている。ここでは、主に項目の分析結果を中心に報告する。

調査概要は以下の通りである。

目的：東京女子大学に通っている学生の学習及び大学生活に関する意識・実態調査

方法：質問紙調査

対象：東京女子大学に在籍している 2～4 年次学生、3022 名（4 月 1 日時点）

（うち：2 年次学生 1052 名、3 年次学生 1050 名、4 年次学生 920 名）

調査時期：2017 年 4 月 1 日～2017 年 5 月 31 日

有効回答数：2513 名

（うち：2 年次学生 917 名、3 年次学生 829 名、4 年次学生 767 名）

有効回答回収率：83.2%<sup>\*1</sup>

（うち：2 年次学生 87.2%、3 年次学生 79.0%、4 年次学生 83.4%）

調査項目：2016 年度までに実施してきた調査結果を踏まえ、「学習」、「学生生活」、「課外・学外の活動」、「図書館」、「その他施設」などの項目で構成している

\*1：過去 5 年間の回収率（2～4 年次学生全体）を表 1 に示す。回収率はすべての年度において、8 割を超えている。

表 1. 2・3・4 年次アンケート回収率

2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度
80.2%	80.4%	84.4%	84.7%	82.8%	83.2%

本報告書では 2 年次、3 年次、4 年次などの表記が出てくるが、上記のとおり在学生アンケートは年度始めに実施しているため、例えば、2 年次生の授業に対する満足度とは、当該学生が 1 年生であった時の授業に対する満足度を意味する。

また、本報告書で用いるデータは全数調査によるものなので  $p$  値などは報告せず、平均値、標準偏差および効果量 ( $\eta^2$ ) のみを報告する。なお、 $\eta^2$  については、Cohen(1988)の基準  $\eta^2 = .01$ (small),  $\eta^2 = .06$ (medium) and  $\eta^2 = .14$ (large)を用いた。

(1) 授業に対する満足度について

以下の3つのカテゴリー別に、過去1年間の学修を通じての授業に対する満足度を尋ねたところ、表2に示すような結果となった。「満足している」と「やや満足している」を合計した割合は、いずれの項目でも9割近い数字となっており、授業に対する満足度は全般的に高いと言ってよい。

表2 授業に対する満足度

	満足 している	やや 満足している	あまり 満足していない	満足 していない	履修 していない
授業全般	% (n) 22.5(552)	% (n) 67.5(1656)	% (n) 9.1(224)	% (n) 0.9(23)	
全学共通カリキュラム科目の授業	20.7(509)	64.8(1592)	12.5(306)	1.2(30)	0.8(19)
学科科目(専門)の授業	30.3(743)	59(1448)	9.1(223)	1.1(28)	0.6(14)

注：それぞれの項目について欠損値(57~58人)は除いて集計した。

もう少し詳しく見ていくため、「満足している」=4、「やや満足している」=3、「あまり満足していない」=2、「満足していない」=1とし、「履修していない」は欠損値扱いにして、上記3項目の得点を合計し項目数で割った項目平均(M=3.12, SD=0.547, 最大=4, 最小=1; 因子分析で次元性も確認。=.87)を算出した(以降「授業満足度得点」とする)。その得点をまず専攻別に見てみる(表3)。

表3 専攻別にみた授業に対する授業満足度得点

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
哲学	3.27	0.56	109	$\eta^2=.024$
日本文学	3.15	0.51	233	
英語文学文化	3.12	0.54	311	
史学	3.22	0.54	210	
国際関係	2.96	0.58	345	
経済学	3.12	0.57	183	
社会学	3.10	0.55	134	
心理学	3.20	0.47	221	
コミュニケーション	3.17	0.51	261	
言語科学	3.11	0.55	244	
数学	2.99	0.59	97	
情報理学	3.09	0.60	86	
全体	3.12	0.55	2434	

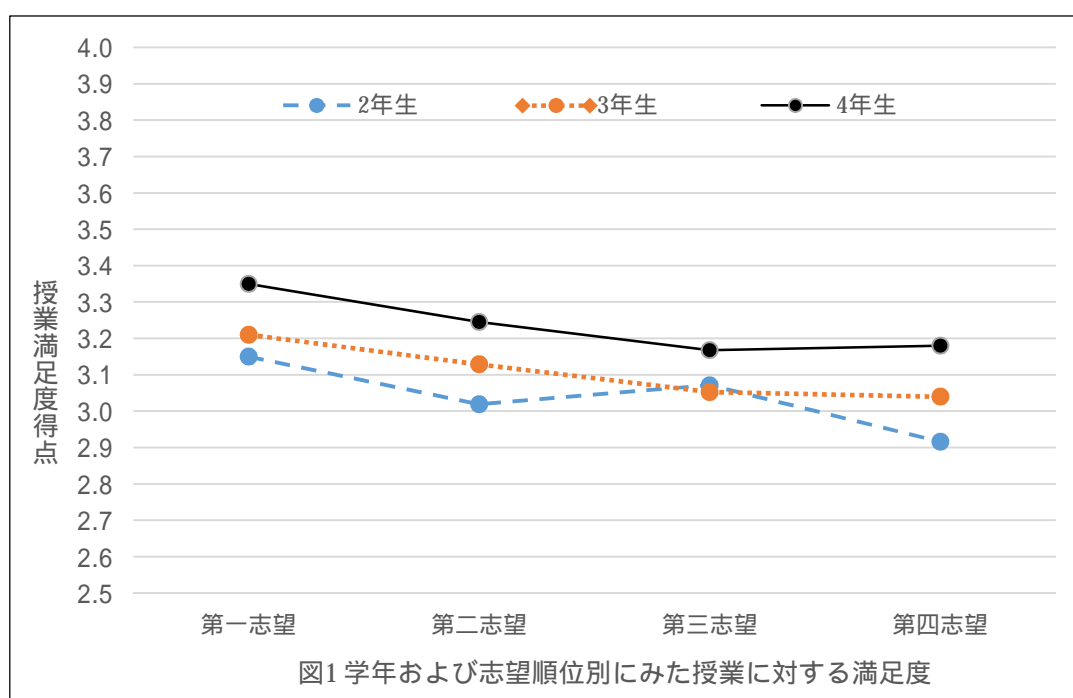
表 3 に示す通り、いずれの専攻でも満足度得点の平均値は 3 前後であり、授業に対する満足度は比較的高いと言えよう。また、効果量をみると  $\eta^2=.024$  で、授業満足度得点に対する専攻間の差はさほど大きいものではないことがわかる。

次に、学年別および入学前の本学に対する志望順位別に授業に対する満足度を比較してみた。表 4 に示すとおり、学年別では 2 年生の平均値 3.03、3 年生の平均値 3.11、4 年生の平均値 3.24 と学年が上がるとつれてわずかながら満足度得点が高くなっているが、その差はさほど顕著なものではない ( $\eta^2=.026$ )。

また、入学前の本学の志望順位が高いほど、満足度もわずかに高い傾向にあったが、こちらも効果量をみると  $\eta^2=.023$  と値は小さく、さほど顕著な差は見られなかった。授業満足度と学年や本学に対する志望順位との関係をもう少し詳しくみてみると、図 1 に示すとおり、高学年で本学の志望順位が高い層ほど、授業に対する満足度が若干高い傾向が見られた。ただ、繰り返しになるが、その差はさほど顕著なものではない (学年および志望順位の効果量はいずれも  $\eta_p^2=.021$ 。また交互作用は見られない  $\eta_p^2=.002$ )。

表 4 学年別および本学に対する志望順位別にみた授業に対する授業満足度得点

		平均値	標準偏差	人数	効果量
学年	2 年次	3.03	0.55	898	$\eta^2=.026$
	3 年次	3.11	0.51	793	
	4 年次	3.24	0.56	743	
志望順位	第 1 志望	3.24	0.54	704	$\eta^2=.023$
	第 2 志望	3.13	0.51	442	
	第 3 志望	3.09	0.54	467	
	第 4 志望	3.03	0.56	798	



## (2) 身についたスキルに関する項目の集計・分析結果

過去1年間の学びを通じてどのようなスキルが身に付いたと感じているかを調べるため、「学術的な文献の読解力」、「人の話を聞いて、要点をつかむスキル」、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をするスキル」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べるスキル」、「論理的でわかりやすい文章を書くスキル」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成するスキル」、「パソコンで図表を作成するスキル」等の9項目について、「全くそう思わない」(=1)から「非常にそう思う」(=4)の4件法で尋ねた。

その結果、図2に示すとおり、どの項目でも肯定的回答の割合(「非常にそう思う」と「そう思う」の合計)が5割を超えているが、特に「人の話を聞いて、要点をつかむスキル」、「課題に応じて、適切な資料を収集するスキル」、「相手や場面に応じたコミュニケーションスキル」の3項目については、肯定的回答の割合は7割を超えていた。一方、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をするスキル」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べるスキル」、「パソコンで図表を作成するスキル」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成するスキル」で若干肯定的回答の割合が低く、これらの項目については、今後様々な角度から改善策を考える必要があるだろう。

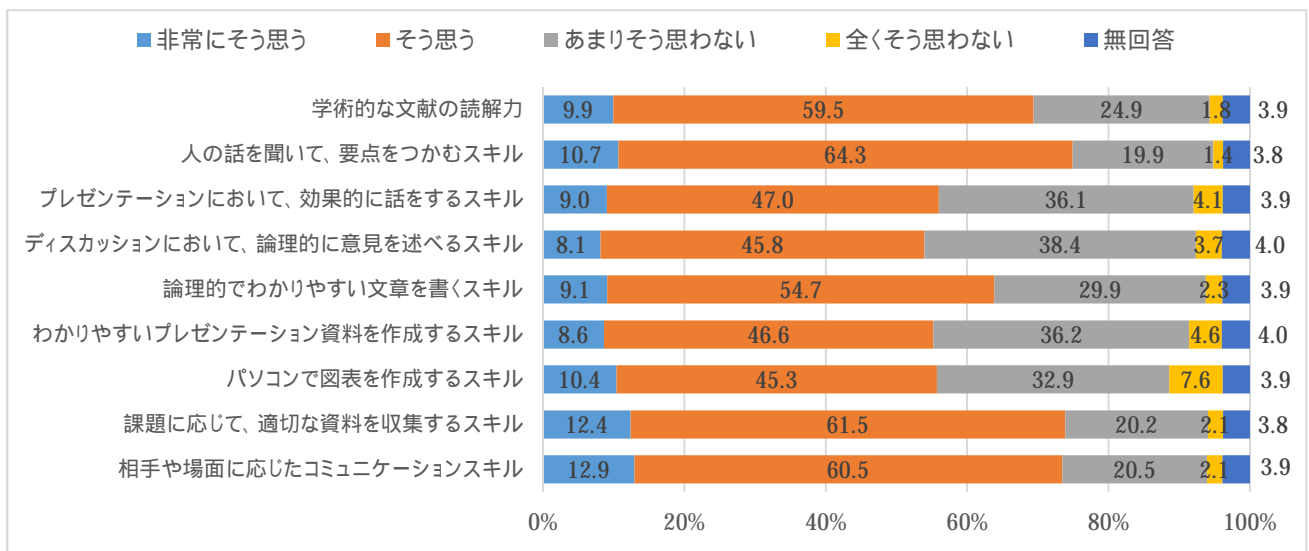


図2 それぞれのスキルについて昨年1年間で身についたかどうかの回答分布

次に、この9項目の得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し「スキル総合得点」(M=2.74, SD=.486, 最大=4, 最小=1; 因子分析で次元性も確認。=.88)として以降の分析で用いることにする。

まず、このスキル総合得点を専攻別に見てみたところ、表5に示すとおり一番低い専攻でM=2.56、一番高い専攻でM=2.82と専攻間で若干得点に差が見られるが、効果量をみると $\eta^2=.017$ でスキル総合得点に関する専攻間の違いは小さいことがわかる。ただ、いずれに専攻にしても、スキル総合得点の平均値は2点台であり、今後さらにこの得点が伸びるような工夫も必要とされている。

次に、このスキル総合得点を学年別および入学前の本学に対する志望順位別に比較してみた。表6に

示すとおり、学年別に見ると4年次の学生が他の二つの学年よりスキル総合得点が若干高いが、効果量は小さい( $\eta^2=.015$ )。また、入学前の本学の志望順位が高いほど、スキル総合得点もわずかに高い傾向がみられるが、こちらも効果量をみると $\eta^2=.007$ と値は小さく、志望順位別にみても得点に顕著な差があるわけではない。すなわち、入学前の本学に対する志望順位が高いか低いかに関わらず、入学後に身についたと感じる様々なスキルにはさほど違いは見られないことがわかる。

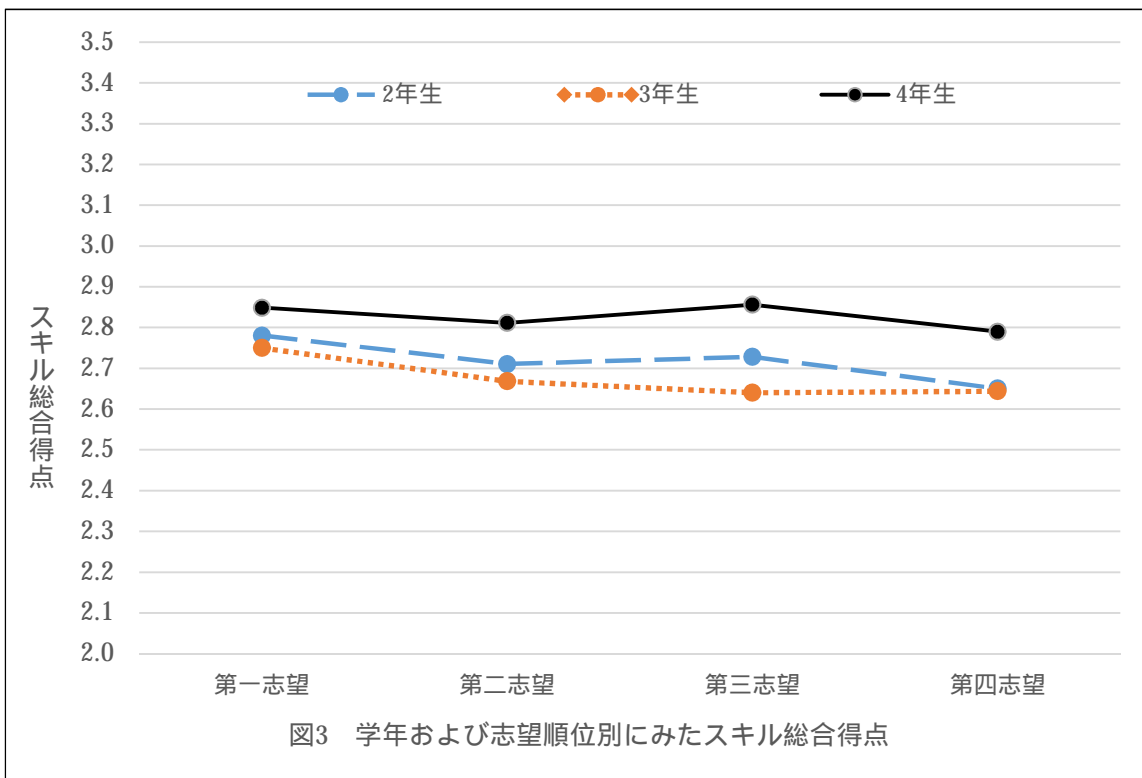
表5 専攻別にみた授業に対するスキル総合得点

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
哲学	2.76	0.55	112	$\eta^2=.017$
日本文学	2.79	0.50	227	
英語文学文化	2.66	0.48	304	
史学	2.79	0.46	208	
国際関係	2.73	0.49	342	
経済学	2.77	0.51	183	
社会学	2.74	0.47	130	
心理学	2.82	0.44	217	
コミュニケーション	2.79	0.49	254	
言語科学	2.66	0.47	243	
数学	2.66	0.47	96	
情報理学	2.56	0.50	84	
全体	2.74	0.49	2400	

表6 学年別および本学に対する志望順位別にみたスキル総合得点

		平均値	標準偏差	人数	効果量
学年	2年次	2.71	0.48	885	$\eta^2=.015$
	3年次	2.68	0.48	778	
	4年次	2.82	0.49	737	
志望順位	第1志望	2.79	0.50	697	$\eta^2=.007$
	第2志望	2.73	0.47	441	
	第3志望	2.74	0.48	458	
	第4志望	2.69	0.49	782	

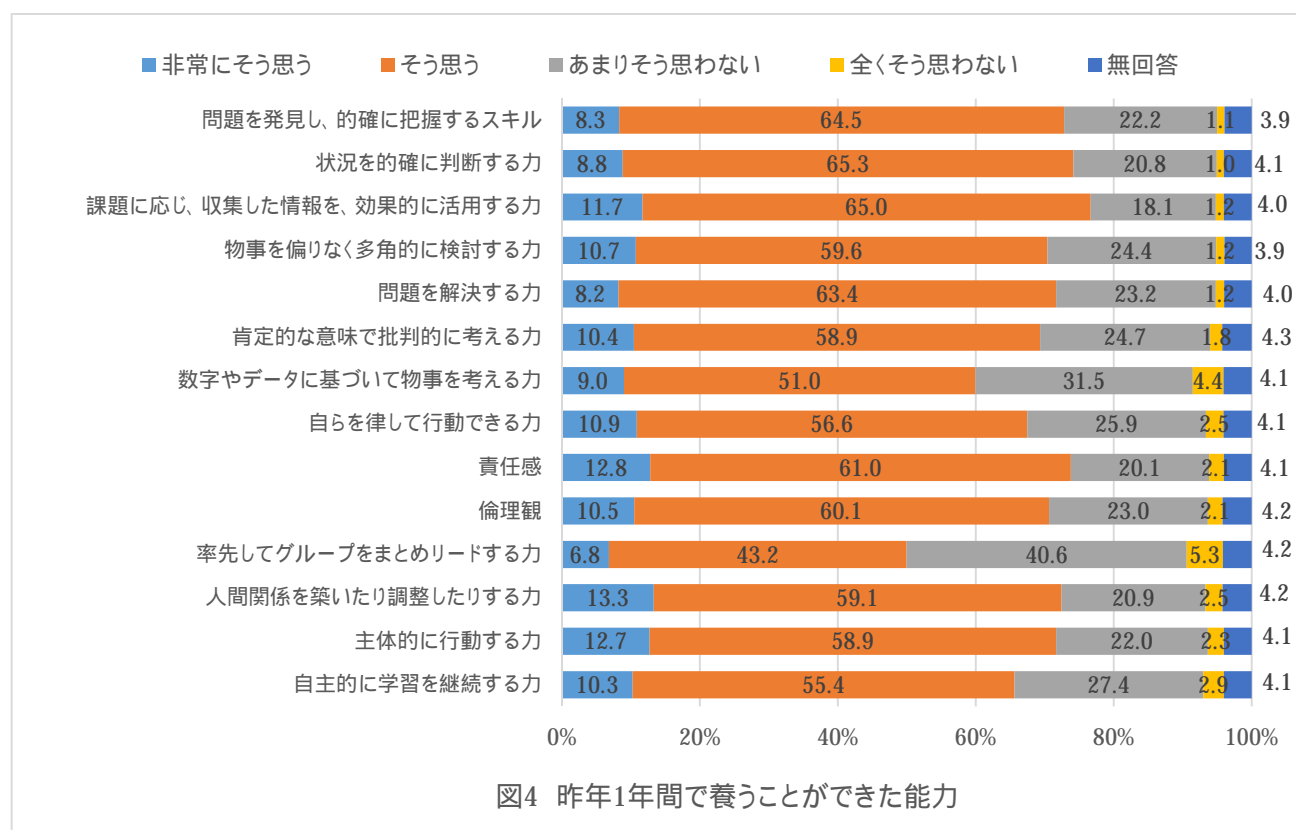
学年および本学に対する志望順位と身についたと感じるスキル（スキル総合得点）の関係をもう少し詳しくみるため、学年および志望順位を独立変数、スキル総合得点を従属変数にした 2 要因分散分析を行った。図 3 に示すとおり、スキル総合得点に対する学年や志望順位の影響はさほど顕著なものではない（学年および志望順位の効果量はそれぞれ、 $\eta_p^2 = .015$ 、 $\eta_p^2 = .006$  であり、また交互作用は見られない  $\eta_p^2 = .002$ ）。



### (3) 身についた能力に関する項目の集計・分析結果

過去1年間を通じて、図4に示す14項目の能力が身についたかどうかを尋ねた(実際のワーディングは「あなたは、昨年1年間の学びを通じて以下の能力等を養うことができましたと思いますか」)。それぞれの能力が身についたかどうかについては、一部の項目を除いて全体的に肯定的回答(「非常にそう思う」+「そう思う」)が7割前後と多く、大半の学生が様々な能力を身につけることができたと感じていることがわかる。最も肯定的回答の割合が高かったのは「課題に応じ、収集した情報を、効果的に活用する力(76.7%)」であった。次いで肯定的回答の割合が高かった項目は「状況を的確に判断する力(74.1%)」、「責任感(73.8%)」などであった。

一方、「率先してグループをまとめリードする力」については、最も肯定的回答の割合が相対的に50.0%と低めであり、今後この能力をさらに伸ばしていく工夫が必要であろう。ただ、これに関連する項目と考えられる「主体的に行動する力」や「人間関係を築いたり調整したりする力」については肯定的回答が7割を超えてはいた。



これら14項目に対して因子分析を行った結果、1次元構造であることが明らかとなった。そこで、この14項目の得点を合計し、それを項目数で割った項目平均を算出して「能力総合得点」(M=2.80, SD=.463, 最大=4, 最小=1,  $r=.930$ )として以降の分析で用いる。



まず、能力総合得点を専攻別に見てみたところ、表 7 に示すとおり専攻間でほとんど差はみられなかった（効果量をもて、 $\eta^2=.004$  ときわめて小さい）。

表 7 専攻別にみた能力総合得点

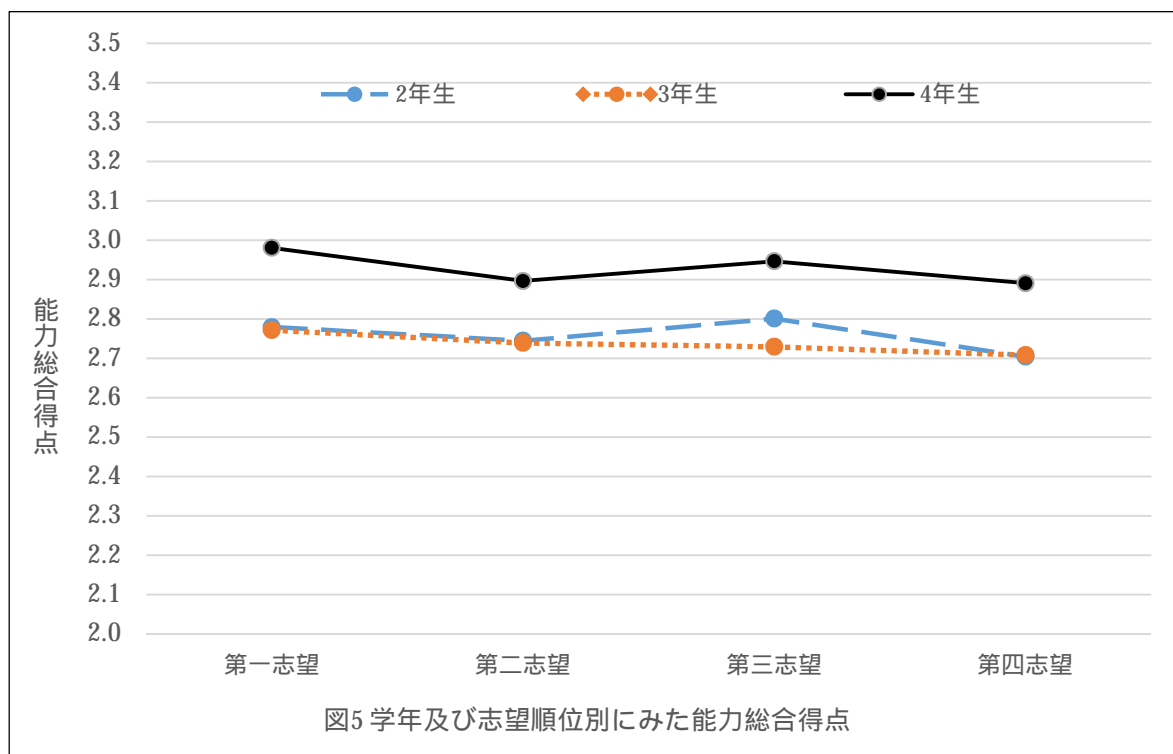
専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
哲学	2.75	0.52	112	$\eta^2=.004$
日本文学	2.83	0.49	221	
英語文学文化	2.82	0.44	299	
史学	2.85	0.48	207	
国際関係	2.80	0.45	343	
経済学	2.81	0.49	183	
社会学	2.77	0.46	131	
心理学	2.81	0.41	216	
コミュニケーション	2.81	0.49	252	
言語科学	2.78	0.43	242	
数学	2.82	0.44	95	
情報理学	2.70	0.46	84	
全体	2.80	0.46	2385	

次に、能力総合得点を学年および本学入学前の志望順位で比較してみた（表 8）。4 年生が 2 年生、3 年生よりも若干能力総合得点が高い傾向にあるが、効果量を見るとさほど大きな違いがあるとは言えない（ $\eta^2=.034$ ）。また、能力総合得点に入学前の本学の志望順位による違いはほとんど見られなかった（ $\eta^2=.005$ ）。

表 8 学年別および本学に対する志望順位別にみた能力総合得点

		平均値	標準偏差	人数	効果量
学年	2 年次	2.76	0.47	880	$\eta^2=.034$
	3 年次	2.74	0.44	773	
	4 年次	2.93	0.45	732	
志望順位	第 1 志望	2.85	0.48	701	$\eta^2=.005$
	第 2 志望	2.79	0.45	437	
	第 3 志望	2.82	0.43	451	
	第 4 志望	2.76	0.48	775	

ここでも、学年および本学に対する志望順位と身についたと感じる能力（能力総合得点）の関係をもう少し詳しくみるため、学年および志望順位を独立変数、能力総合得点を従属変数にした 2 要因分散分析を行った（ここでも効果量のみ報告する）。図 5 に示すとおり、能力総合得点に対する学年や志望順位の影響はさほど顕著なものではない（学年および志望順位の効果量はそれぞれ、 $\eta_p^2 = .031$ 、 $\eta_p^2 = .005$  であり、また交互作用は見られない  $\eta_p^2 = .001$ ）。

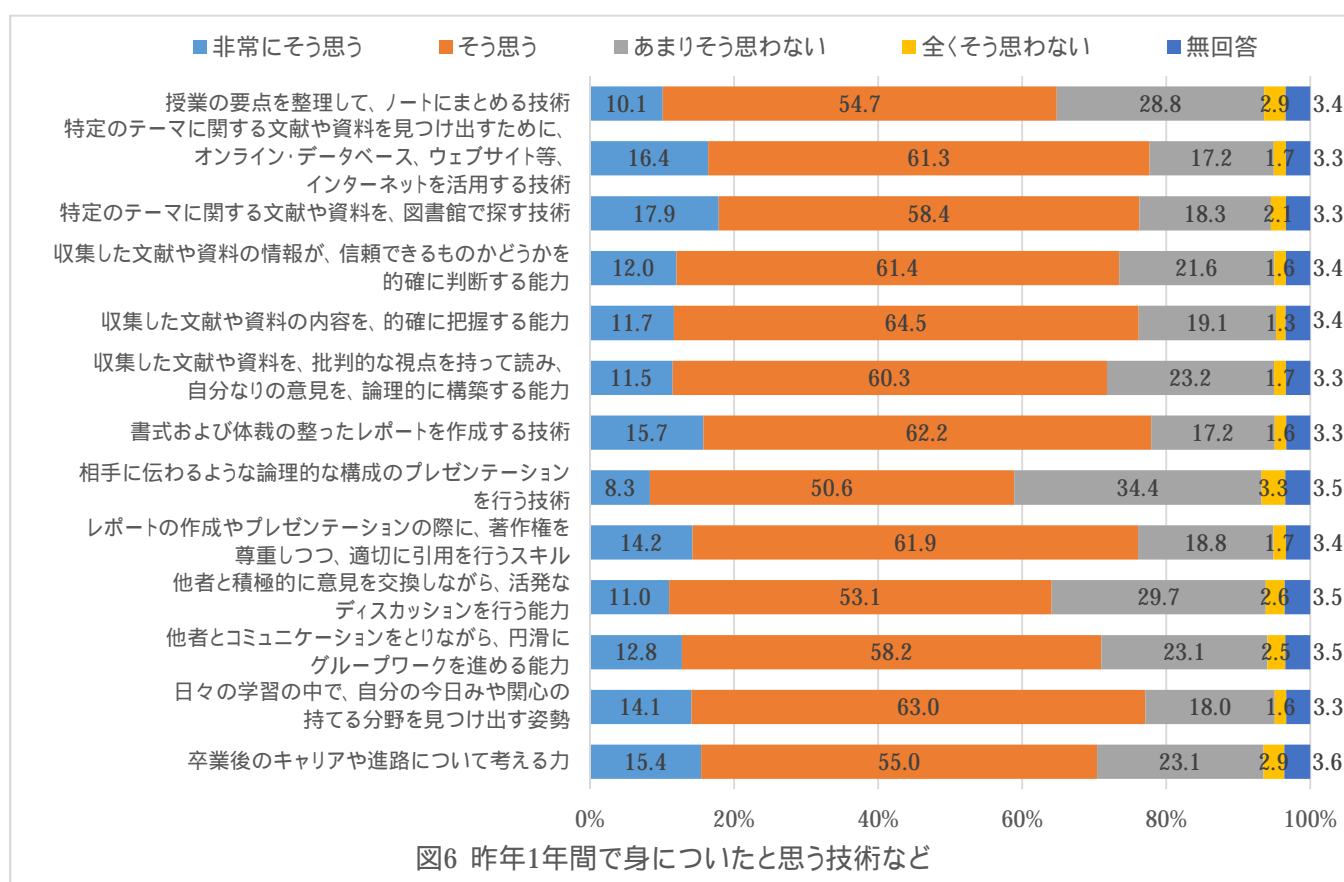


#### (4) 身についた技術に関する項目の集計・分析結果

今回の調査では、さらに図6に示す13項目について、過去1年間の学びを通じて、身につけることができたと思うかどうかを尋ねた。この図にあるとおり、肯定的な回答が7割～8割程度と高い項目が多かった。例えば、「日々の学習の中で、自分の興味や関心の持てる分野を見つけ出す姿勢」を尋ねた項目では77.1%の学生が肯定的な回答をしており、学生自身が積極的に学習に参加する力を身につけていたようだ。また、「文献や資料を見つけ出すために、インターネットを活用する技術」、「文献や資料を、図書館で探す技術」の、自分が必要な情報を探す技術は2項目とも、77.7%、76.3%と高い割合で肯定的な回答が多かった。1年次に行われる図書館利用のオリエンテーションなどの大学の様々な取り組みの成果が現れているといえよう。

また、「書式及び体裁の整ったレポートを作成する技術(77.9%)」、「レポート作成やプレゼン時に、著作権を尊重し、適切に引用するスキル(76.1%)」のレポート作成に関する2項目も肯定的な回答が7割を超えており、レポート作成時の基礎的なスキルが身につけている学生が多いこともわかる。

ただ、「相手に伝わるような論理的な構成のプレゼンテーションを行う技術」、「他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力」の2項目については、身についたと思うと回答した割合が若干低めであった。



次に、これら 13 項目について、（無回答を除き）「非常にそう思う」=4、「そう思う」=3、「あまりそう思わない」=2、「全くそう思わない」=1 として、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、固有値 1 以上を基準で 2 因子が抽出された（表 9 参照）。

第 1 因子には、「特定のテーマに関する文献や資料を、図書館で探す技術」、「収集した文献や資料の内容を、的確に把握する能力」、「書式および体裁の整ったレポートを作成する技術」など、授業の課題を進めるための能力に関する項目の因子負荷量が高かったため、この因子は「情報探索・処理に関する能力や技術」を表すものと解釈できる。第 2 因子では「他者とコミュニケーションをとりながら、円滑にグループワークを進める能力」、「他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力」、「卒業後のキャリアや進路について考える力」、「日々の学習の中で、自分の興味や関心の持てる分野を見つけ出す姿勢」など学生生活を送る上で必要な項目に因子負荷量が高かったため、この因子を「学生生活スキル」と命名した。

表 9 身につけることができたと思う技術に関する項目の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	F1	F2	共通性
情報探索・処理に関する能力や技術（ $\alpha = .89$ ）			
特定のテーマに関する文献や資料を、図書館で探す技術	<b>.846</b>	-.126	0.578
特定のテーマに関する文献や資料を見つけ出すために、オンライン・データベース、ウェブサイト等、インターネットを活用する技術	<b>.761</b>	-.058	0.519
収集した文献や資料の情報が、信頼できるものかどうかを的確に判断する能力	<b>.758</b>	.043	0.624
収集した文献や資料の内容を、的確に把握する能力	<b>.751</b>	.076	0.652
書式および体裁の整ったレポートを作成する技術	<b>.528</b>	.192	0.461
収集した文献や資料を、批判的な視点を持って読み、自分なりの意見を、論理的に構築する能力	<b>.510</b>	.286	0.553
レポートの作成やプレゼンテーションの際に、著作権を尊重しつつ、適切に引用を行うスキル	<b>.421</b>	.336	0.494
授業の要点を整理して、ノートにまとめる技術	.317	.235	0.263
学生生活スキル（ $\alpha = .85$ ）			
他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力	-.142	<b>.933</b>	0.700
他者とコミュニケーションをとりながら、円滑にグループワークを進める能力	-.052	<b>.831</b>	0.632
相手に伝わるような論理的な構成のプレゼンテーションを行う技術	.121	<b>.605</b>	0.486
日々の学習の中で、自分の今日みや関心の持てる分野を見つけ出す姿勢	.248	<b>.532</b>	0.535
卒業後のキャリアや進路について考える力	.161	<b>.507</b>	0.401
因子間相関	.721		

第1因子に負荷量の高かった8項目の得点を合計し項目数で割った「情報探索・処理得点」(M=2.89, SD=.478,  $r=.885$ )を作成した。同様に、第2に負荷量の高かった5項目の得点を合計し項目数で割った「学生生活スキル得点」(M=2.81, SD=.533,  $r=.850$ )を作成し、以降の分析に用いる。

まず、身についた技術に関する得点を専攻別に比較してみたところ、表10に示すとおり専攻間での差は小さいものであった(効果量は、情報探索・処理得点で $\eta^2=.018$ 、学生生活スキル得点で $\eta^2=.010$ )。

表10 身についた技術に関する専攻別比較

専攻	情報探索・処理得点			学生生活スキル得点		
	平均値	標準偏差	効果量	平均値	標準偏差	効果量
哲学	2.88	0.48	$\eta^2=.018$	2.72	0.6	$\eta^2=.010$
日本文学	2.93	0.51		2.82	0.56	
英語文学文化	2.89	0.48		2.8	0.53	
史学	3.03	0.44		2.86	0.53	
国際関係	2.91	0.46		2.83	0.51	
経済学	2.88	0.49		2.86	0.57	
社会学	2.79	0.45		2.77	0.54	
心理学	2.94	0.42		2.85	0.51	
コミュニケーション	2.89	0.49		2.84	0.55	
言語科学	2.85	0.49		2.76	0.51	
数学	2.8	0.49		2.77	0.49	
情報理学	2.73	0.48		2.61	0.51	
全体	2.89	0.48		2.81	0.53	

表11 身についた技術に関する学年別比較

		平均値	標準偏差	人数	効果量
情報探索・ 処理得点	2年次	2.85	0.48	897	$\eta^2=.018$
	3年次	2.85	0.46	780	
	4年次	2.99	0.48	744	
	合計	2.89	0.48	2421	
生活スキル 得点	2年次	2.75	0.51	889	$\eta^2=.050$
	3年次	2.71	0.53	779	
	4年次	2.98	0.52	745	
	合計	2.81	0.53	2413	

次に、情報探索・処理得点および生活スキル得点と学年との関係を見ると、表 11 に示すとおり、情報探索・処理得点の方は効果量が  $\eta^2=.018$  と小さく、その違いはわずかであるが、生活スキル得点の方は、効果量が  $\eta^2=.050$  であり、4 年次生の得点が 2～3 年次生の得点より若干高いことがわかる。

最後に、情報探索・処理得点および生活スキル得点と本学に対する志望順位との関係をみてみると、情報探索・処理得点および生活スキル得点のいずれについても、志望順位が高いかどうかとの間には顕著な関係は見られなかった(表 12)。

表 12 身について技術に関する本学志望順位別比較

		平均値	標準偏差	人数	効果量
情報探索・ 処理得点	第 1 志望	2.94	0.49	709	$\eta^2=.005$
	第 2 志望	2.88	0.42	444	
	第 3 志望	2.90	0.45	458	
	第 4 志望	2.85	0.51	788	
	合計	2.89	0.48	2399	
生活スキル 得点	第 1 志望	2.85	0.55	704	$\eta^2=.003$
	第 2 志望	2.77	0.50	445	
	第 3 志望	2.81	0.51	457	
	第 4 志望	2.79	0.54	786	
	合計	2.81	0.53	2392	